

Title	日本吉利支丹宗門史(第六回)
Sub Title	
Author	Pages, Leon(Yoshida, Kogoro) 吉田, 小五郎
Publisher	三田史学会
Publication year	1933
Jtitle	史学 Vol.12, No.1 (1933. 4) ,p.105- 122
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330400-0105">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19330400-0105</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 日本吉利支丹宗門史（第六回）

レオン・パジエス著

吉田小五郎譯

## 第九章 一六〇七年（慶長十二年）（註一）

代理管區長神父パエスが公方様及び其子訪問の事——富士山——神父パエス秀頼及び其母を訪問す——耶蘇會員——天笠即ち印度の宗門——生き残つた慈悲役二人の難儀——山口に於ける迫害——老ひたる坊主の改宗——ドミニコ會員——フ

ランシスコ會員——アウガスチン會員

estas)の命令によつて、各個の犠牲が辛じて行はれた。之等の諸侯は其領内に於て主權を振ひ、グラバッソ大名といふ稱があるので、公方に屬してはゐなかつた。併し、教會の生活に於て常にさうであるやうに、この比較的の平和は昔からのキリストンの心を堅くし、未信者の改宗を増加せしめるに十分であつた。

公方様は中々宗教に好意を寄せるやうにならなかつた。彼は太閣様の命令をその儘繼續して居つた。されば宣教師等は、依然追放人と見做されてゐた。領主や主權者の重臣等はキリストンになつてもいゝといふ許可が出てゐなかつた。併し晩年には一般の迫害は行はれなかつた。屋形(ヨウギ)公方に敬意を表し、且つ又ヨーロッパよりの獻上品を呈せ

しめて來たが、前年司教の受けた好遇に力を得て、自ら行つてこの君主を訪問することにした。當時君主は一城(註二)を築いてゐた駿河 (Sourounga) の府中 (Fountchou) に居つた。上野殿は神父管區長の助言により、公方の意を汲んで神父に謁見はかなうであらうと答へた。

神父バエスは、五月五日(○四月十日)長崎を發し十一日目に大阪に着いた。途中播磨 (Farima) の小港・室 (Mouro) の住民舉つて、多くの船に乗つて出迎へ、神父に歓迎の意を表する爲、果物をもつて押しかけて來た。神父は彼等にさゝやかなる靈的の贈物、念珠や、畫像並にアグヌス・デイ (Agnus Dei) をわかつ與へ、彼等を満足させて郷里に返した。

大阪でも、群衆の集り來ることはこれと同じで、京都及び伏見又同じであつた。神父は、二十年前此地方に住んでゐた事があつたが、當時キリストンの數は、極く僅かであつた。ところが今や近頃迫害があつたにも拘はらず、著しく増加してゐるのを認めた。京都の所司代は、京都より駿河に至る沿道に住む公方の諸役人が神父の世話ををするやうに、之に宛てた廻状を賦與した。神父管區長は、京都の修院長神父モレホン (P. Morejon) と日頃の伴侣たる他の

神父一人及び日本人の神弟三人を同伴した。八日の後、彼は府中を去る五里のところにある一所に到着し、幕府の沙汰を待つた。三日の後、彼は案内を受けて府中に行つた。上野殿は人を遣して彼に敬意を表せしめ、君主の他の寵臣ソトサブロードノ(Sotosaaburodono) (後藤庄三郎か) 自から出向いて斡旋を申し出た。翌日謁見あり、其場に長崎の町に關係ある重大事件を處理する爲、數日前に到着した神父、ジヤン・ロドリゲスも居つた。上野殿は、取次の役をつとめた。公方は好意のこもつた數語を述べたのであるが、之は嚴肅なる謁見に於ては眞に名譽のことであつた。君主は、其室に退いてから、侍臣の中に入つて、謁見者の日本、支那にある同宗者に對する權力と、毎年彼に命じたる特別の用件につき受けた盡力について長い間語つた。攝理の密に幸することをよく示して居つて、語るべき大事な事があるといふのは、謁見の行はれた當日、公方の長子ではあるが正室の出にあらざる爲、帝國を繼ぐことの出來なかつた、越前の領主三河守の兎報がとゞいたことであつた。ところ上野殿は、公方が若し此死を知つたならば、謁見は延期せられ、又待遇も厚くなくなることを豫知して、國主が謁見の前に此報を知ることを極力妨げ、越前から來た書狀は皆之を押へて、

謁見の時刻を繰り上げた。この非常な好意は、大いに宣教師等の爲になつた。かくて世の人は、國主の意志の他の發表がなければ、神父等は再び居住を許されたものと思つていい」といつてゐた。その故は、日本の法によると、若し追放を宣した人が、追放せられた人を其面前に出ることを許したならば、此者は實際に於て再び寵を受けるものとなつてゐるからである。(註三)

公方は神父管區長に、其子にして繼嗣たる人に敬意を表せんが爲、駿河の府中に至つて、此地方より數リユーのところに、近頃、伊豆 (Izzou) の國で發見せられた銀坑をたづねることを勧めた。此銀坑は大層銀に富み、又少量の金をも出し、年々公方に莫大の收入を供給した。公方は非常に之等の鑛坑を重んじ、之を外國人に示すことを望んで居つた。今回彼は神父ジヤン・ロドリゲスに神父管區長に代つて行つて見ることを許した。

上野殿は、其父にして將軍の最も懇ろにせる顧問本多佐渡殿 (Fondassadandono) 宛の一書を神父管區長に與へた。府中より江戸までは東方四日路あつた。途中、有名なる山があつて、此山は高く且つ美しき爲、日本の作家や美術家が屢々讀するところである。即ち富士 (Fuji) とか富士山

(Fouichan) で全國を睥睨する山中の巨人にして、其山頂をきはめるに三日を要する。フィリツ・ピンより新エスパニヤに向けて出帆したエスパニヤ人等は、其頂に雲を認め、尙間々其噴火口から吐き出す焰の爲、彼等は夫を『火の山』と呼んだ。其圓い頂には何も生えてゐず、雲や雪を頂いて正にピラミッド形に聳えてゐる。中腹には、古來の巨大なる森林が續いてゐる。此山は其峰に連る幾多の王國に、其影を及ぼしてゐる。其中腹には、偶像の寺院が澤山あつて、その主なるものは、淺間 (Chenghen) と呼ばれる本尊の神を祀つたものである。尙盲人の異教信者達は、此山を聖山として毎年八月大巡禮をする。といふのは此候になると頂が最もきはめ易いからである。

彼等は、駿河より伊豆を経て更に相模 (Sangami) に入り、此處には、日本の舊都にして公方乃ち將軍の居所たりし鎌倉 (Camacoura) の町がある。鎌倉はもと戸數二十萬に上つたが、當時は減じて漸く五百戸位であつた。神父は、此地に滯在すること二日、古蹟を巡視した。就中、青銅の巨大なる偶像の田園の中に放棄され、野鳥の休場となつてゐるのに目をとめた。江戸に到着するニリュウ手前で、神父は府内のキリストン等が彼を迎へる爲に、果物、食料品

等さゝやかな贈物を携へて來るのに會つた。若い將軍は性來親切な人で、訪問者を優遇した。一番奥の溜りの間には、帝國內で最も秀れた坊主が一人控えて居つた。一人は免長老(Taichoro)にして、他の一人はガチョオ(Gatcheo)と稱し、將軍に謁せんが爲に來てゐた京都の寺院の長老である著名な坊主共數名が一緒であつた。併し此國主は、先の者を後にせんと欲し、先づ神父パエスを召さしめた。將軍の重臣グルベルスール本多佐渡殿と相模殿とは神父を送つて最後より一つ前の部屋に案内し、彼に御殿を案内するやうにとの命令を下した。此宮殿は、公方のそれに劣らず壯麗にして、惜し氣もなく金をかけ又最も偉大なる美術家の手になる繪を以て裝飾してあつた。人は方二パルム(Opalm一パルムとは四指の構經に等しい)足らずある羽目板各の細工を黃金一枚即ち八百クルザードと見積つてゐた。そして『聚樂』(Jouracou)即ち

天國ラディスと銘うつて太閣様が京都に建てた舊の宮殿を見た者は、この宮殿が將軍の宮殿よりも立派であるとのみ思つてゐた。大大名の面々も、亦各々贅をつくした住宅を建てた。かくて之等廣大で而も數多き建築物は、商人や一般庶民の住んでゐる町の側ではあるが別の町を形造つてゐた。神父は、尙城とその城壁を巡視した。此城及び城壁の普請に際

し、前年將軍は、諸侯から其知行に應じて工人を召集し、六箇月前から、莫大な費用を以て、約三十萬人の人を使つて城普請に當らしめた。

神父は、主なる保護者なる相模殿及び本多佐渡殿のところに暇乞に行き、實に親切にして寛大なる佐渡殿に日本の教會の利益と福音弘通の自由とを依頼し、宣教師の説く聖教は、日本の政治にも、臣下の其領主に對する服従にも、決して反対なるものではなく、全く道理に適ひ、諸侯や人民に其義務を教へるものなることを言ひ添へ、又此教は現世の爲に非常な效用あり、來世の爲には殊にさうなる事を説き、佐渡殿より將軍に願つて、其父君が許せる如く、下級の庶民階級のみならず諸侯や貴族にも教會に入るの資格を與へられんことを懇願した。佐渡殿はキリスト教をほめ、幹旋の勞をとることを約束した。

神父管區長は、キリストン慰問の爲、八日間江戸に滯在した。キリストンは、神父等が自分等の間に一教舎を建てるれんことを希つてゐた。神父パエスは、單に事業が實現されるといふばかりでなく、廢滅といふ切迫した災害なく支持されるやうになる迄、せめて彼等を満足させるといふ種々な希望を江戸に與へたことは駿河と同様であつた。

神父はかく好成績をおさめて駿河に向つて歸路についたのであるが、神父ロドリゲスは、公方の招に應じて、伊豆の鑛坑を訪問する爲に乗船せしめ、同時に日本人の神弟パウロは、數日間江戸に留まり、宣教師等の配慮により長崎で製作された時計を一つの塔にしつらへる事となり、なほ外にもう一人の神父は、一人の神弟と共に江戸の北方三日路のところにあつて、嘗て誰も訪問した事もない上野（Canzouke）の地方を偏歷した。

同神父は、仲々多く人の巡禮に行く信濃（Chinano）に行き、岐阜（Guifou）其他の地に、美濃（Mino）の昔から管區長は、江戸を發し、先づ相模の小田原（Vondavara）に行つた。太閤様が武力を以て滅す前には、此町は、關東

のキリストンを慰問して、京都に歸つた。  
管區長は、江戸を發し、先づ相模の小田原（Vondavara）に行つた。太閤様が武力を以て滅す前には、此町は、關東八州の首府であつたが、今日では此特權は江戸に歸屬してゐる。或る奥山に生れた阿彌陀（Amida）といふ評判の人坊主が住んでゐた。情ない未信者等からは、其母がたまく夢に見て懷胎したものと信じられ、人々から拜まれるのは前世の約束であつて、若くより浮世を捨てゝ木の根や果實を食べて命をつなぎ、終は阿彌陀を勧請し、若し濟度を望むものがあれば、其人も亦阿彌陀を勧請することを

一生懸命に教へると信ぜられてゐた。彼は自身の體から時に不思議な後光がさし、或る鐵製の草鞋を履くと、地面の下をくぐつて富士山までも行ける、尙ほこの山の靈と交通すると言ひはつた。帝國の各方面から彼を拜むためにやつて來た。彼はその奉仕者の敬意を受けるために祭壇に上り、神弟は、其詐欺を發かんと欲し、若干の果物を供物として携帶し其庵をたづねた。坊主が出て來たので、神弟は讚辭を呈したところ、更に大いなる尊崇をかち得んが爲に、根も葉もない己が誕生の奇蹟、其聖なる生涯及び自稱の神性について物語つた。然るところ、神弟は話を先に進めて、御身は生きた阿彌陀であるから、阿彌陀經の中にある若干の難題を吾々のために解決してくれる事が出来るであらうといつた。之に答へて坊主は、『例令私が阿彌陀であるにしろ、或は阿彌陀でないにしろ、自分のことはわからない。兎に角、夫は母から聞いたので、私は母の證言を信じてゐる。阿彌陀經の章句に就いては、其儘が其意味である』といつた。時に神弟は、確固たる權威と疑ふべからざる證據とを以て意味は坊主のいつた事それつきりでしかないといふことを證據だてた。坊主は、自分は嘗て學問した事がな

いから何も知らないといつて辯明した。神弟は語をついで『然らば、若し御身が學問をしないで何も知らないとしたら、如何にして教の道に衆生を教へようとなさるか、又もつと適切にいへば、御身は何故衆生を欺くのか』といつた。神弟は勝利を主張したが、坊主には言葉がなく、其弟子及び禮拜者の前で己が無智を告白するより他なかつた。

神父管區長は、駿河より京都を経て長崎に歸るべき許可を公方に願ひ出た所、君主は、唯々之を許可したのみならず、また或事件に連累して長い間幕府にとゞめおかれて、

恐らく終には、謫流に遭ふべきを氣遣つてゐた長崎の代官(レジヤン)ターンに贈つた吾救主が十字架の遺物をはめこましめたところ、この聖なる遺物の禮拜は信者達の熱心を大いにたきつけた。

神父は平生、大阪城に居つた若い城主秀頼に、敬意を表しに行かないでいいとは思はなかつた。實の所、耶蘇會では、大阪に一つ傳道所を有し、且つ同地には相當多數のキリシタンが居つた。秀頼の重臣(ベルヌル)（○片桐）は、神父の活動に感じて、之を遇するに懲懃を以てし、自身の名に於て、又秀頼の名を以て、過ぎにし反抗を幾重にも陳謝し、キリシタンを優遇する旨約束した。市守は神父を秀頼の面前に誘致し、會談中、若君の御覽に供すべき何か面白い事はないかどうかを質した。神父が、門下の問答師(カテキスト)が立派に歌ひ歐洲の器樂を奏する心得のある由を答へるや、重臣は翌日其人々をよこすやう依頼した。果

可きものであつた。京都では、彼が通過の時は伏見、大阪及ひ堺のキリシタンが集まつた。それは滔々たる説教、並に、耶蘇會の傳道所にて嚴肅に執行せられたる教會の祭式に列せんが爲であつた。之等のキリシタンは大赦の機會を利用して聖體を授かつた。

して、此少年達は、銘々立琴、七絃胡弓、三絃胡弓、管付  
オルガン等を携へて來り、秀頼の面前で夜曲を演奏した所、  
秀頼は満足した様子であつた。此訪問は、大阪のキリシタ  
ンに若君の好意を保證する爲には別して有效であつた。太  
閤様の後嗣に與へられた此尊敬の表はれに對しては、秀頼

の母さへ、満足の意を表した。

神父・バエスは、公式に奔走すること、並に耶蘇會員や傳  
道所の訪問を終るや、長崎に向つて歸途についた。彼は大  
阪から、耶蘇會の第一の根據地たる安藝の廣島を來り、乗  
船して一つの島に向つた。此島は、廣島より五リユ一の所  
に位し、毛利殿の舊領たる九箇國中でいたく尊崇されてゐ  
る神を祀つたもので、其壯麗なる社殿はジオマリ（O. Dgiom  
盛にして社殿といふはい）といふ往時の一君主の建立すると  
ころといはれてゐる。此社殿の中にて、人々は神父に向つ  
て、神の靈は二匹の鼠に變じてゐるといった。果して彼は  
二匹の鼠が偶像の前で米を噛つてゐるのを目撃した。

次いで神父は豊前的小倉に行き、同地のキリシタン並に  
領主長岡越中殿は心をこめて彼を優遇した。越中殿は彼に  
米四百俵を贈つた。

管區長は其處から更に筑前の博多に赴いた。以前甲斐守

といふ名で知られてゐた筑前守（Tchicouzennoami）は、  
彼に銀二十枚約百クルザードを贈つた。次に同國の秋月に  
行つたのであるが、此地の城主は筑前守の叔父にしてキリ  
シタンなる黒田惣右衛門であつた。神父は同地では新しい  
教會堂の獻堂式を挙げた。

神父は更に耶蘇會の新しい根據地たる筑後の柳川に行つ  
た。城主田中筑後殿（Tanase Teichicongodono）は、大層  
歓待した。秋月及び柳川からセリュー離れた所には、尊敬  
すべき思出に遺る豊後のドン・フランシスコの女婿にして  
自らもキリシタンであり臣下の改宗に大いに意を用ひた秀  
包（Findecan）の舊領久留米があつた。此キリシタン一味  
のものは、幸にして残つて居つた。城主は神父を其宮殿に  
招き、而も彼に敬意を表するが爲、耶蘇會の傳道所から城  
までの道路を掃除して水を撒かせた。異常な尊敬を拂つた  
しるしで之は最も高貴の人にはのみさうされるのであつた。  
城主は輩下の諸侯を引き具して橋の中央にある門外で出迎  
へた。彼は盛宴を張り、尙一度立上り、お酌までして遣へ  
た。更に彼は、神父を其住宅に訪問して聖なるミサ唱歌及  
び説教を聽くことを請うた。果して彼は次の日曜日には、  
訪問し、神父に贈物として銀二十枚を持参し、更に教會堂

の聖像に當てる爲にして、一萬二千デニエ(denier)(約

十三、四クルザード)の喜捨をした。彼は、大層かしこんで聖なる獻祭に臨み、大層學識ある一神弟が日本の宗派に就いて述べた演説に對して、大なる讚辭を呈した。なほ彼は殊に食事中彼の爲にした交響樂に感心し、小さなオルガンを聽き乍ら、もう阿彌陀の極樂にゐるやうな氣がすると叫んだ。

神父が海路有馬に赴く前、城主は門までの通路を掃き清め、水を撒かせて出發にも同じ敬意を表し、漕手二十五人の小舟を用意し、門外まで見送つた。

かくて僅かの間に、神父は有馬を経て長崎に到着し、五箇月の無事の旅を終つた。

一六〇七年(○慶長十一年)の末頃、日本在住の耶穌會員は約百四十名で、内六十三名は神父で、其他はたゞの神弟であつた。管區中での首都にして司教の常住地たる長崎には、一箇の學林があつて、之が地方の修學院並に獨立した修練所の役をして居つた。有馬には宣教師等の學林と、ラテン語研究の修學院とがあつて、兒童に読み書きを教へる學校が附屬して居つた。京都には、學頭の住宅一箇及び上京と首府に接續して宮廷の所在地たる伏見との二箇所に各駐在

所があつた。

一六〇六年(○慶長十一年)と一六〇七年(○慶長十二年)間に、異教徒にして改宗する者は、一萬五千人に上つた。長崎の町は、全町擧げてキリストianにして、而も司教に依つて治められ、日本の模範であり、又ポルトガル人やアジア人が通商に引きつけられて大勢輻湊することが、引いて全國に神の教を宣傳するに與つて力があつた。

有馬の地方では、領主有馬のジヤン(○晴)及び其夫人ドーナ・ジユヌタが宣教師等に助勢したことは、驚くばかりであつた。實に國中の人都キリストianであつた。

有馬の學林の日本人の一神父は、薩摩のキリストianを訪問し、國主より鄭重な待遇を受けた。キリストianなる一城主の領内には、其土地の住民が天竺宗(Tendjicouchou)即ち印度或は東洋の宗派と呼ぶ日本では新奇な一宗派が存在してゐた。其教理及び禮拜の形式からすれば、此宗派は眞神について、何程かの知識を持つてゐるらしかつた。二人の故老の話により、神父は、聖フランシスコ・ザベリヨが其師父等に福音を述べ傳へたといふ事、爾來耶穌會の宣教師等が二回まで其地に入込んだことがあるといふ事を知つた。然るに至福の神父は、領主が坊主共の煽動によつて

迫害を加へるので、同地に逗留が出来ず、かくて彼は、他の神父等と同じく到着したのであつた。新に來た宣教師は、之等單純な人々に、其先行者達はキリストになる筈であつたといふことを注意させ、且つ數日の中に、人々が其漠然とした陰だけはもつてゐた神の眞理の大意と要點を説いた。五人の者が洗禮を受けた。此新改宗者の中に、一人年老ひたる下婢があつて、神父が偶像的の遺物を所持してゐるか否かを質した所、彼女は懷中から、黒壇製の古ぼけた

二連の珠數を取り出し、相傳のものであるといつた。同地方の住民は、神父に向つて、此婦人は有名な魔法使で、人々の迷信的の術を使つて夥しい病人を直したといつた。年老ひたる下婢は、辯解して自分は何の呪ひもしたのではなく、たゞ此病人に健康を回復させ給ふやう天主に祈り乍ら、お見せした遺物を病人に戴かせると病人は直つてゐたといつた。神父は、此遺物匣を譲り受けて見ると、木綿の巾着の中に丹念に包んだ包があつて、それは又 *Lignum crucis* (○木の十字架) と書いた紙で包んであつた。遺物は其中に入つてゐた。同じく此紙の中には、*Agnus Dei* (○神の小羊) と書いてあつたに相違ない小さな赤い蠟燭の片カケと一面に受胎の聖母、他の一面には受難の我救主の像についてゐる錫のメダ

イが入つてゐた。されば神父は、之等貴重な品々は、此老下婢の兩親か家族が、受洗の折に、聖フランシスコ・ザベリヨの與へたものと推定し、人々に、此遺物の尊い文字と、之を與へた人の高徳と、此の遺物が老下婢のして來たやうに淳樸と信仰とを以つて用ひる時は、病人を直したり、それに類する事をする力のあること、又かくして我救主が、遺物の價値を表はす爲に、彼女が異教徒であつても、病人を直すことで彼女と力を協せたといふことを教へた。

肥後には、宣教師が入り込む事を得たが、獄屋の中では、生き残つた慈悲役一人が難儀をして居つた。新手の番人は聖イグナチヨ (Saint Ignace) の夫と同じで、善事をすれば却つて残酷になるばかりの猛獸と同じであつた。ジャンは他もう一人のヨブと同様、未だ年も若く、異教徒で體は弱く、法官に丸裸にされた妻に心を引かれてゐた。ジャンは妻が其仲間二人の妻のやうでないのを見て、内心、心を痛めつゝ、妻に忍耐し天主に信頼するやうに諫めた。彼は死病にとりつかれ、同時に賄を運んで來てくれる忠實な奴隸の扶助を断たれてしまつた。從つて、時に彼は丸一日何も食べないで過すことあつた。併し一方で、肉體が弱

つて來ると、一方では精神力と耐え忍ばうとする意志が漸時増してくる」とは驚くばかりであつた。神父デ・バエザ(P. de Baeza)は、ジヤンが一向自分の體を大事にしないといふことを聞いて體を氣をつけるやうに勧めて貰つた。ジヤンはおとなしく之に従つた。

筑後の領主田中（吉政）も亦好意ある態度に出でた爲、属従の多くは、洗禮を受けた。

之に反して、筑前の領主は、イエズス・キリストの教に好意を持つてゐたので、二年前、人々は博多に一つ美麗な教會堂を建てたのであつた。異教徒の改宗は、實に夥しかつた。死刑の宣告を受けた四人の悪人、法官から、命を失ふ前に、少くとも、其心をしつかりしておかなければならぬといふ注意を受けた。神弟は、彼等に教を説き聞かせた上に洗禮を受けた。此死刑の宣告を受けた者の中一人は、嘗て其宗派の説教者であつたのであるが、十字架につけられると、やら、阿彌陀の空なる事、イエズスの御名の優れて居り、之なくば救はれないと言ふことを熱心且雄辯に説き出した。

前庭にある十字架の下に行つて互に笞をあてあつた。越中殿の母は、かうした信心から出た厳格な戒行の事を色々耳にすると、之を目のあたり見んと欲し、侍女や町に住む一番高貴な夫人等大勢を連れて來て見た。彼女は悉く感心し、若し其處に救ひの道を認めなかつたら、誰もかうした苦行をする譯がないといつてほめるだけでは氣がすます、侍女の中フランセッスでキリシタンになりたい者があればなつてもいゝといつた。此夫人は、屢々教會堂を訪問したり、十字架を拜したり、進んで教理を聽いたりして、信仰を抱く心持の多分にある事を自ら示した。領主の弟たる此方の子は、若し公

方の怒を招く恐れがなかつたらキリストになつたに相違ない。彼はそれに就いては、領主の後嗣たる内記殿と同じであつた。秀れたキリストであつた奉行の一人は、死刑の宣告を受けた人々が説教を聞き、洗禮を受けて死ねるやうにしてやつた。果して多數の者が、此無限の財寶を有益に使つた。或異教徒が餘計苦しむやうにと頭を下にして十字架につけられ終日はうつておかれた。ところ熱心なキリスト等が彼の側に近づき、キリストの教を信じた上で死んで行きたいか否かと訊いた。果して彼は然りと答へ、附言して、自分は屢々問答師の説教を聞いた事があつて、イエズス・キリストの教の外に救済の道のない事を知り、又自分は間もなく死んで行く身であるから、諸人が自身をキリストとなり、靈魂を救はれんことを希うといつた。キリストのない神父は、彼の許に問答師を遣はし、此問答師が抜目の大要を説明してやると、彼は其罪を深く悔ひて聖なる洗禮を受け、日が暮れて法官等が刑執行の爲來り、槍をもつて刺し一路彼を天に送つた。同宿（Doyoucou）の面々は側を離れず、キリストと共に彼が魂の爲に祈禱を唱へ、死に至るまで彼を勵ますよすがとした。

一キリスト婦人は、早朝ミサに行き、川岸に来て、菰

に包まれた生れたての嬰兒が流れて行くのを見た。彼女は一人のキリストを呼んで水の中に入つて、其赤子を拾つて貰つた。婦人は取敢へず其子を教會堂に連れて行つて洗禮を授けて貰つた所、同日此子の魂は天に昇つた。

安藝の國の首府廣島では狂的の異教徒の中にあつて、キリストの數は僅かであつた。併し國主大夫殿（○ Tayoudo, 衛門大夫正則）は、宣教師等を保護してゐた。然るに坊主共は、キリストの教は、人々の好みに添うことや如何なる悦樂にふける事も禁じ、且つ古き事屢々一千年にも及ぶといふ尊ぶべき祖先の教を蔑にさせる、故にかうした日本の習俗を無視した、異國の坊主の弟子となるのは狂氣の沙汰であるといつて非難し、全力を擧げて新改宗者を亂さうとした。その中に宣教師等は、神の許を以て其羊の群を守り、一方キリストの方では、惡魔や其弟子共が虚偽の邪智さへ狼狽させるに足る、力強く且つ眞實の道理によつて、守られてゐることを自ら感じて居つた。

キリストの説教を聴いた者の中には、安藝、及び備後二國の領主大夫殿の世嗣（*Fils Colhéritiers* 刑部少輔正之、別所を嗣ぐ、然れども事ありて正則の虐待を受け慶長十二年十一月二十三才にて死す）並に同領主の養女にして其甥の一人に嫁したる一貴人（○未考）があつた。然る

に政治的の恐怖あるが爲之等の人には辛じて差しひかへて居つた。

元偶像教の熱心な信者であつた、他の貴婦人は、教義を聞いて、キリスト教になる決心をし、先づ手始めに、二歳になる娘を教會堂に遣つて洗禮を授けて貰つた。子供がキリスト教となつて戻つて來ると、母親は、坊主共が如何なる災難にも效く厄除として門徒に賣りつけた、釋迦 (Chas.) の經文からとつた文句がいっぱいに書いてある紙を皆住居の壁から剥いで、他の偶像もろ共に焼き拂つた。此婦人は、其夫君と共にどうしても教を聽きたいといふ心持を持つて居つた。

廣島で一番熱心なキリスト教は、ルイス・チクジドノ (Luis Tejidojido) と其子シモン (Simon) であつた。彼等は領主について江戸に行き、領主の命を受けて將軍が首府内につくらせやうといふ噴水に用ひる石を切出す爲伊豆 (Izuou) に行つた。伊豆逗留中、ルイスは禮拜所 (オラトアール) を造り、其處でキリスト教徒等と共に祈禱した。

一方山口に於て、二三年前に始まつた迫害は、ゆるまなかつた。毛利殿は實に領内のキリスト教を總て絶滅する決

心であつた。彼は既にいづれもこの教會の支持者たりし重臣の一人にして、誰よりも勇敢なるベルシオール豊前殿、並に盲人ダミアンを死刑に處し、その同宗者を容易に壓倒したものと信じてゐた。然るに殉教者の血は、他の保護者を指嗾した。同時に、宣教師等は、時にこの地方に入込み、神聖なる祕蹟の救濟をもたらした。

廣島に居た神父は、一六〇六年 (慶長十一年) 此教會堂を訪問した。彼は三十人の成年者に洗禮を受け、さうして二年、二十五年、三十年にわたる告白を聽いた。其故は若干のキリスト教は、其間全く手近に告白 (コンフェスル) 聽聞僧を持たなかつたからであつた。併し彼等は、異教徒の中にあつて、艱難を嘗めて居つたにも拘はらず、其信仰を固く守つてゐた。中には七十歳の老婦人があつて、彼女は半世紀の餘も以前に至福 (ビアンヌール) の神父ザベリヨにより洗禮を受けられ、爾來告白することが出来なかつた。彼は尙毛利が居城を構えてゐた萩のキリスト教を訪問した。

毛利殿は神父の入込んだことを知つて、其爲猛烈に立腹した。彼は更にバルシオール及びダミアンには後繼者としてサンシエ・カノー・ハンエモン (Sanche Cano Hanyemon) といふ者のあることを知つた。そこで彼はハンエモンを遠

さける決心をし、先づ手始にきやうだいのジユスチン・ヨゴロー（○Justin Yogo）より始める事とした。ヨゴローは輕卒に他人の過失に連累し、キリシタンとして他の誓又烙印の試練を受けることを申出で、或る偶像教の形式による火の誓を拒絶したのであつた。

過度にして最早人のあまりやらない厳しさを以て、毛利殿はジユスチンに町のすじへを引き廻して恥をかゝせ、生き乍ら火あぶりにし、其罪もない妻は磔刑にすべしと宣告した。兩人は何れも、實に殊勝な心持を抱いたまゝ死んで行つた。ジユスチンの屍は、頭を下にして十字架につけられた。サンシェは捷を犯して死體を掠取つたといふ廉を以て閉門を命ぜられ、次いで首府萩に於て毛利殿の領内の主なる奉行サシエドノ（○Sachiedono 佐瀬 長門守元嘉か）の前に呼び出された。彼の友人であつた此奉行は、長時間とり検べたが、其確固たる信心に打勝つことは出來なかつた。サンシェは終には、後に若しもサシエドノが、自分が信仰をもつたまゝ生かしておくことを承認してくれたならば、自分は他の方なら何でもおとなしくつかへ、果は召使となつて生涯草履取をすることも厭はないといふに至つた。サシエドノはとう／＼家族の者を一人残らず殺すといつて嚇したが、サ

ンシェは尙ほもびくともしなかつた。彼は山口に行つて家族の者と相談する事を許され、此機を利用して家族を慰問して其信仰を堅めしめ、其上死ぬる覺悟をした。此間に、其女が毛利殿の子に婚約が調つてゐた公方の子三河守（○結城秀康）が亡くなつた爲、毛利殿は已もなく急遽駿河に赴いて、主權者に哀悼をのべることとなつたゝめ、サンシェの處刑は延期された。誠に彼は身内の者を全部引きつれて國を出ることが出来た。併しこの事が信仰に關はつてゐる事を思うて、異教徒を躓かせない爲、ふみとゞまる決心をした。

諸人は京都より美濃と尾張に傳道した。薩摩守（Satsuma no Oani 薩摩守忠吉、家康の第四子）を名乗つてゐた公方の子尾張侯は、痛く神父を優遇し、教會の再建を許可した。後、神父の京都に歸るや、彼は鷹狩をして捕つた野鴨を贈つた。このことは、此國では限り無く重んぜられる好意であつた。然るに間もなく該侯は死んだ。（○忠吉薨ぜしは慶長十二年三月五日）同教師は山のキリシタンを訪問していくもの成績を擧げた。彼は若狭侯の養子なる一城主を改宗させた。當時、マリヤ京極の子なる若狭の城主と丹後の城主との二人は、將軍を憚ることなく、キリシタンとなつた。マリヤは京都に於て司教の手から堅信の

秘蹟を授つた。

法華宗の中でも一人著名な知識の改宗したことは、延いてその弟子たる信長の一子の改宗を促すに至つた。餘り大した置位にはおかれず且つ公方には顧みられなかつた該侯は、其屬從に洗禮を受けさせ、尙夫人を眞の宗教に寄きよせたいと願つて居つた。

教會堂建設の爲前に百クルザードを寄進した名門出身の一婦人は、其頃まで非常な艱難を嘗めて來てゐたのであつたが、それといふもキリストンになりたい爲であつた。何しろ太閤様の養女で同君主の正室にして常平生神や佛の禮拜には恐ろしく熱心であつた北政所様 (Kitano Mando-cosama) の保護の下にあつた。其夫ビゼンノ・カンノゴドノ (○ Bigenno Cannogodono. Cannogodono は Gingodono の誤に川家を繼げ) は三箇國 (○ 備前、備中、美作) の未だ異教徒にして、謫せられて後も同じく未信者なる夫人の兄肥前殿と共に中々重要的人物であつた。然るに此貴婦人の慈善に償ひんが爲、天主は信心深い一婦人により彼女に教を受ける事を勧めた。かくて此婦人は、彼女に洗禮を探けた。

京都の附近には、一向宗 (Icochous) の老僧が住んでゐて、彼は妻があつても相變らず教義を説いて居つた。其婿

は彼にキリストンの教を聽きに行く決心をさせたところ、初めての日から彼はすつかり感心し、歸つて來ると、其歸依者を集めて、自分が之までつと教へて來た謬説に對して謝罪することにした。<sup>(註五)</sup> 無來彼は説教を聞き、尙妻子と共に洗禮を受け、餘生を前からの弟子達の改宗に捧げた。

良家の子で十四歳の若者が、長崎に旅行してゐる中、改宗して、京都に歸り來り、法華宗の坊主共により猛烈な反駁を受けたところ彼は彼等の一人で大學者であり且つ同宗中主要なる僧房の長老に答へて勝味があつた。然るに此坊主はたてつゝに新論を考へ出して來るので、若者は之を耶蘇會の一神弟に廻した。宣教師等は、之を公開して將軍の氣嫌を害ふことを恐れて、問答を許す事を躊躇して居つた。併し彼等は、終に坊主の懇願によつて之を承認した。神弟は同書によつて坊主に勝を制し、坊主をだまらせた。坊主の弟子達は彼に對して憤慨し、かくて其同僚を自分等の堂から追ひ出した。

播磨 (Harima) の首府姫路 (Himeyuri) に傳道が行はれた。神父は途中室 (Mouro) のキリストンを慰問した。

大阪には、四箇所の癪病院があつて、患者約四百人收容してあつた。キリストンの慈善は、未信者を感化する事大

にして、説教の補助となつた。公方の不快を買ふ事を恐れて、キリストianになる事を躊躇して居つた諸侯も、其重臣の改宗を奨励した。秀頼の重臣の一人は、其部下が教を聽く事を奨励し、かくて十二三人の者が改宗した。日本の極東部奥州 (Vochou) 數箇國の太守 <sup>セイユール</sup> ジュガザンドノ (Jouga-zandono) の世子は進んで改宗した。彼は歸途神父を一人連れ戻り、領内に美麗な教會堂を建てたいと思つてゐた。

然るに幾許もなく彼が頓死した爲に、このたのもしい期待は有耶無耶になつてしまつた。

此年 <sup>レニル</sup> 會員神父デ・ルエダ (P. de Rueda) は濱町 (Famamatchi) に行つて滞留した。

謹謹とは、<sup>ル</sup>・モラレス (P. de moralez) ルズマラガ (Zumarraga) の神父一人しかゐなかつた。神父エルナン・ヘルベ (P. Hernandez) と神弟デ・ラ・アバディア (F. de la Abadia) が病氣になつてマニラに歸つてしまつた。併し一六〇七年六月 (<sup>○慶長</sup> <sup>廿二年</sup>) 新に同會の補佐者が到着した。即ちジエラ・デ・サン・イヤシント (P. Joseph de S. Hyacinthe) イヤシント・オルファン <sup>(註セ)</sup> (P. Hyacinthe Orfanel) の兩神父と俗神弟ジヤン・<sup>フアン</sup>・サン・ベ

ヤン・ル (Fr. Lai Jean de Hyacinthe) が夫であつた。聖エミリウ會の神父等は、謹謹では京治 (Kiodomari) の教會堂しか嘗て持つてなかつた。信者の家が町や村の禮拜所の役をした。江口 (<sup>○</sup> Yeutoutchi) どは、同地の城主 <sup>ドン</sup>・ジャック・チョンジョーロ (D. Jacques Tchoungours) が其邸宅を呈供した。大なる精神的の成果があつた。

フランシスコ會員神父アロンソ・ムリーベ (P. Alonso Munoz) は、大阪の教會堂と修院とを大規模に建て直した。宣教師等は神經痛にかゝつてゐた奉行を介抱して之を直してしまつた。此城主と其子ヒロイ (<sup>○</sup> Firoy) は、彼等に強い好意を示した。

2. Aduarte, I. I, o. 67. Sicardo, I. I, o. 1, 4 et o. VII.

(註二) 此年駿河の城が出來た。——支那の大帝が日本の皇帝に敬意を表する爲到着した。(内裏年表、附錄)

(註三) 三河守の薨するや、其家臣八人が自殺した。其點に就いては同年ウヨス (Ouyosou Onyosou は恐らく Oyosou の誤ならん。此年即ち慶長五年十月以來薩摩守忠吉は尾張の國を賜はりて清洲城に移り住みしよりかくはいふなるべし。併し、忠吉は同十二年二月六日關東に下り、十三日頃より病にかかり三月三日江戸を發し五日芝浦にて薨す) にて薨ぜし公方の子の他の一人薩摩守の死後矢張り同じであつて、六人の家臣は其主の死後生き長らへることを望まなかつた。當時人々は廢止されたらしい此人の命を犠牲にする蠻風が復活することを恐れて居つた。此目も當られない光景が、初めは江戸の住民滿座の中で、次には尾張の住民の眞只中で、公然行はれたのであつた。(Guerr, o. 4.)

(註四) 一六〇六年、七年二年間に起つた耶穌會の出來事の概略を此處に記しておかう。教區内の本部であり首都たる長崎には、六十八名の耶穌會員があつて、中二十七名が神父で、其他は神弟であつた。神弟の中十七名は修練者で、十五人が日本人、二人がボルトガル人で、何れも新に入つたばかりの者で、同市に建てられた修練所最初の人々であつた。學林の教會堂とは別な小教區の會堂が五つと、多數の禮拜堂とがあつた。其教會堂の中、三つは其主任司祭が日本人の神父で、

日本人としては此主任司祭として特に司教から綴品されたのは最初の人々であつた。夥しい會員のある組合が二つあつて一つはイエズスの聖名がついて居り、他の一つは、聖母の組合であつた。尙又一つの慈善院と一つの病院とがあつてそれに各々教會堂が附屬してあつて、二つとも同じやうなものであつた。二年間に市内で、帝國の諸方から來た來信者で洗禮を受けた者が二千人あつた。

なほ諫早、深堀、古賀、浦上 (Ouyacami)、内海、本土山 (Honjōyamai)、以上六箇の之に附屬せる教舍があつて、教舍で七百人の授洗が行はれた。九箇所の教會堂が建てられた。有馬の學林及び修業所には、八つの教舍が附屬して居つて、こゝには三十人の耶穌會員があり、十六人の神父で其他は神弟であつた。修業所には八十名の生徒が居つた。同地には又受胎告知の組合があつて、精神的の成果が豊富であつた。ラテン語の組が二つと日本文學の組が一つあつた。尙ほそこで聖式執行の爲に聲樂及び器樂を教へて居つた。外來から來た成年にして洗禮を受けた者が三百五十人あつた。

司教は一萬七千近くの人の信仰を確立した。

志岐及び天草の島には、三人の神父と二人の神弟が居つてキリストianの世話ををして居つたのであるが、之等の教徒は嘗て其領主寺澤殿によつて猛烈な迫害を受けたことがあつた。此領主も和いで來たので信者は愈々信仰を堅く守り、あやふやな者は氣をとりなほし、なほ百三十人の新受洗者があつて

此教會を飾つた。

筑前の博多には、二名の神父と三名の神弟が居つた。二年間に未信者の洗禮を受けた者千九百人。此地方の一領主の領内だけで二千人近くもあつた。

同じ領内で、城主の叔父にして熱烈なキリストンたりしミツシエル惣右衛門殿の所領秋月には、成年者の洗禮を受けた者が二千名に及んだ。又領主の出費にて一教會堂が建立せられた。

新しい根據地筑後の柳川には神父、神弟共に一名宛居つた。

千四百人の受洗者があつた。

豊前的小倉には、神父、神弟共に二名宛居つた。數は僅でも實のいふキリストンの爲に、世子の城内に新しい一教會堂が建てられた。

豊後では、諸方に散つてゐて而も其異教徒たる領主には、見え目出度くないといふさういつた同地方の昔からのキリストンの教化につとめてゐた。千七十人の受洗者があつた。なほ新しい教會堂が建立された。

安藝の廣島には、三名の神父と一名の神弟が居つて、同地方の教會ばかりでなく、毛利殿の領内やイゴ(Igo)の地方の教會堂をも世話をし、更に豊前や豊後にまで行き涉つてゐた。未信者の洗禮を受けた者千二百五十名もあつた。

京都の學頭の住宅と共に附屬せる教舎には、七名の神父と十三名の神弟、つまり二十名の耶蘇會員が居つた。若干の神

父と神弟は、大層學問ある一神弟の指導の下に之を反駁する爲に諸宗派の研究をして居つた。未信者の洗禮を受けた者七百三十名あつた。神父と神弟二人で美濃や尾張の地方に傳道に出かけた。

耶蘇會第二の傳道所（即ち上京にあるもの）には、神父、神弟各々一名宛居つた。二百五十人の受洗者があつた。

宮廷の所在地たる伏見には、神父一名と神弟三名とが居て、それに若干名の説教師たる同宿が居つた。成年者にして洗禮を受けた者は百五十名あつた。

大阪には、神父と神弟各々一名宛居つた。同地には二百名の受洗者があつた。大阪は海に面した港なるが爲に、告白のため方々から人が集つて來た。京都、伏見、駿河、及び江戸に行かうといふ者は普通其つもりで其處にとまつた。

堺には神父が一人と神弟が一人居つた。三十名の成年者が受洗した。

北國三州の一なる加賀の首府にして、前々から好意ある態度をとつてゐたこの國即ち加賀の領主肥前殿の居住する都市金澤には、神父が一人と神弟が一人居つた。彼等はなほドン・ジニスター右近殿が主權を握つてゐた能登の世話をも受けている。成年者の受洗者が九十人あつた。神父は越前の中を慰問した。

（註五）彼の殊勝な言葉を引用しよう。彼曰く『いつになく今日私が皆様をお招きした事を驚かれるのは無理はありません

ん。何故といつて今までのならひからすれば、あなた方が此私をお招き下さるといふのが當り前なのです。而もあなた方がおいで下さつた御好意を幾重にも謝します。抑も、私がお呼び立てした理由といふのは、私はもう、之から先、毎度陳腐な御祈禱をして貰ふとて私のところにお出でを願う譯には行かなくなつたのです。何となれば、實に今は私はキリスト教の説教を聽いてからといふものは、あなた方と御同様で今日が今まで拜んで來た阿彌陀は何の私を救ふことの出來ないといふ事、それから、なほ又日本の宗派の中では、どの宗派だつて救はれる見込のない事、たゞ救はキリスト教に一人あるといふことを判然と知りました。故に私は、人類の眞の救主たる天地の創造者を拜むことに決心を決めました。

私にまで慈愛の眼まなざしをおとめ下され、私がこの老の果に至つて私の智慧をお導び下さつて造物主を知らして下さつた事に對して造物主に無限の感謝を捧げます。何故といつて若し私がそれを知りそくなつたら私は岐度迷つたでせう。私の過失と、甚しい不明との爲に、もつと早く之を知らなかつた事や當然さうすべきものを尊ばなかつたのを殘念に思ふばかりでなく、大層ひどい無禮を加へたり、あなた方皆にまで慙々私は皆様に御すゝめするのです、私はあなた方が目を開いて、

今まで歩いて來られた間違つた道を適當な時機にされんこ

とを皆さんに是非おすゝめしたいのです。暫て私の無智から日本のある宗派で教へる地獄の方へあなた方を導いたと同じやうに、今度はあなた方に天への道即ちキリスト教を見出されるよすがともならば私は仕合せです。』(Guerre, c. XIX)

(註六) 神父シムヤト・ジ・サン・イヤシントトレン王國(royaume de Tol'de)のヴィラレーボ・ド・カルグネス(Villarejo de Salvanés)の生れでオカナン(Ocean)の修院の修業者であった。

(註七) ヴレンス王國(royaume de Valence)の生れる神父イヤシント・オルファンは、バルセロナ(Barcelone)の殉教者聖カタリナ(Saint Catherine)の修道院の修業者であった。